

平成19年 3月2日	農作物病害虫発生予報 3月	山口県病害虫防除所 山口県農業試験場
---------------	--------------------------------	-----------------------

～目次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病害虫】	2
	【その他の病害虫】	6
III	病害虫・農薬情報	
	病害虫メモ — 植物ウイルスワクチンでウイルス病を防ぐ・	6
	様々な天敵導入技術	7
IV	参考(予報の見方、気象予報、3月のテレホンサービスの内容)	8

I 予報の概要

農作物名	病害虫名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
カンキツ	かいよう病	やや多	やや多	少
タマネギ	白色疫病	平年並	平年並	前年並
	べと病	平年並	平年並	前年並
イチゴ	灰色かび病	平年並	平年並	少
	うどんこ病	平年並	平年並	前年並
	アブラムシ類	やや少	やや少	少
	ハダニ類	多	多	前年並
	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	前年並

作物	担当者
普通作	野崎(病害) 中川浩二(虫害)
果樹	藤村(病害) 殿河内(虫害)
野菜	岡田(病害) 岩本(虫害)
茶	中川浩二(病害虫)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

II 予報

【主要病害虫】

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	少	発芽前（3月）

(2) 予報の根拠

ア 2月中旬の越冬病斑調査では、発生ほ場率は31.8%（平年22.3%）、発病葉率は4.2%（平年2.2%）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 気象予報では3月の気温は高く、降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

ア 病斑のある葉や枝の剪除を徹底する。

イ 防風樹や防風ネットを整備し、強風による枝・葉の付傷を防ぐ。

<防除のポイント>

かいよう病にかかりやすい品種（アマナツ、イヨカン等）や本年発生が認められる園及び前年発生が認められた園では、発芽前に無機銅剤（ICボルドー66D、コサイドボルドー、Zボルドー等）を必ず散布する。また、マシン油乳剤を散布した園でICボルドー66Dを使用する場合は、1か月以上あけて散布する。

タマネギ

1 白色疫病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生は認められず平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、3月の降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

水媒伝染するため、ほ場の排水を良好にする。

2 ベと病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	二次感染株発生初期 (平年初発生日：3月28日)

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生は認められず平年並みであった(±)。

イ 初発生は1月29日(平年2月19日)に山口市大内の県予察ほ場で認められ平年に比べ早かった(+)

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

越年り病株が10aあたり3株以上確認されるほ場では発生が多くなるので、越年り病株の早期発見、抜き取り処分を徹底する。

<防除のポイント>

二次感染株が見られた場合は、治療効果のある薬剤(リドミルMZ剤、リドミル銅剤、フォリオブラボ剤、カーゼートPZ剤、ホライズン剤等)により直ちに防除を行う。なお、フェニルアמיד系薬剤(リドミル剤、フォリオブラボ剤、サンドファンC剤)は耐性菌出現防止対策として作付期間中1回程度の使用にとどめる。

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	発病初期

(2) 予報の根拠

2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率12.2%(平年11.5%)、発病株率0.8%(平年0.5%)、発病果率0.1%(平年0.1%)で平年並みであった(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害果や被害茎葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

<防除のポイント>

ア ジカルボキシイミド系薬剤(スミレックス剤、ロブラール剤)は県内の一部で、ポリオキシシン剤は広範囲で耐性菌が出現しているため、使用後は必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は使用を控える。

イ 耐性菌の出現を避けるため、同一薬剤の連用並びに同一系統の薬剤間での輪用は避ける。

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病前または発病初期

(2) 予報の根拠

2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率9.8%(平年25.0%)、発病株率1.1%(平年2.3%)、発病葉率0.3%(平年0.7%)、発病果率0.1%(平年0.3%)で平年並みであった(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害果や被害茎葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

<防除のポイント>

ア 発病前の予防または、発病初期の防除を徹底する。

イ 発生した場合、発病した葉を除去した後、治療効果のある薬剤を用いて防除を実施する。

ウ 耐性菌の出現を避けるため、同一薬剤の連用並びに同一系統の薬剤間での輪用は避ける。

3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	—

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率22.0%(平年21.7%)、寄生株率1.6%(平年5.3%)で平年に比べやや少なかった(-)。

イ 気象予報では、3月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

局所的に発生することが多く、多発後の防除は困難なので、下葉の葉かきをこまめに行う一方、ほ場をよく観察して早期発見に努める。

<防除のポイント>

ア 薬剤散布を行う場合は、訪花昆虫に影響の少ない薬剤を使用する(日本バイオロジカルコントロール協議会HP(<http://www.biocontrol.jp/>)等を参考)。訪花昆虫の巣箱を施設外に出して薬剤散布を行う場合は、薬剤の影響が無くなってから巣箱を施設内に戻すようにする。

イ 発生が局所的である場合は部分散布を行う。また、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。

4 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	前年並	—

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は51.2%（平年34.1%）、寄生株率は20.6%（平年11.0%）で平年に比べ多かった（+）。

イ 気象予報では、3月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

アブラムシ類の<耕種的防除等>を参照する。

<防除のポイント>

ア 肉眼での発見が困難なナミハダニ(黄緑型)が発生している場合があるので、拡大鏡などで観察するか、葉裏に白紙を擦り付けてハダニが潰れた薄緑や赤色の跡の有無を確認する。

イ その他については、アブラムシ類の<防除のポイント>を参照する。

5 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	—

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%（平年0.7%）、寄生株率は0%（平年0.01%）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、3月の日照時間は短い（-）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

日光が差して気温が上昇してくると葉や蕾の食害を始めるので、ほ場をよく観察して捕殺する。

<防除のポイント>

アブラムシ類の<防除のポイント>ア、ウを参照する。

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想 発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イチゴ	菌核病	やや多	多	多	4.9	0.6	発病茎葉、発病果は除去する。
	萎黄病	やや多	多	前年並	7.3	0.6	発病株は抜き取り、ほ場外に持ち出して処分する

Ⅲ 病害虫・農薬情報

病害虫メモ

植物ウイルスワクチンでウイルス病を防ぐ

ウイルス病はアブラムシやコナジラミ等による虫媒伝染、農作業による接触伝染、連作ほ場での土壌伝染、株分けや接ぎ木など栄養繁殖による伝染など様々な方法で植物に伝染します。ウイルスに感染し発病した植物は自然に治癒することがなく、また治療する農薬もありません。そのため、ウイルス病を防ぐには、作物をウイルスの感染から守ることが最も重要です。

私たち人間がインフルエンザやはしかなどウイルスから体を守るため、ワクチンを注射するように、作物のウイルス病にもよく似た予防法があります。植物はすでに感染しているウイルスと同じか、極めて近縁なウイルスには感染しにくいという現象を1929年にMcKinneyがを見つけました。その後、あらかじめ植物の生育に影響を及ぼさない病原性の弱いウイルス（弱毒ウイルス）を作物の苗に感染させておくと、ウイルスの感染を受けにくくなることがわかり、今日では「植物ウイルスワクチン」として、いくつかのウイルス病の防除に利用されています。

山口県では、これまでにカンキツやヤマノイモなどで「植物ウイルスワクチン」の開発を行ない、すでに現場で実用化されています。現在はユリの生産で大きな問題となっているウイルス病対策のひとつとして、開発を進めているところです。

(専門研究員 村本和之)

様々な天敵導入技術

I 天敵農薬の利用

ハダニ類に対するカブリダニ剤、スリップス類に対するヒメハナカメムシ剤など、大量に増殖された天敵が農薬として販売されています。長所としては、①「化学農薬使用回数」にカウントされない、②導入が極めて省力的、③「施設栽培の野菜類」など使用場面が広い、等があり、短所としては、①特定の害虫にしか効果がない、②効果が出るまでに時間がかかる、等があります。天敵農薬を利用するあたっては、以下の2点が鉄則です。

- ・害虫の密度ができるだけ低い時期から導入する
- ・他の病虫害防除には、天敵に影響の少ない薬剤を使用するか、スポット散布を行う

II 土着天敵の利用

購入天敵ではなく、自然に発生する天敵を利用することも可能です。例えば、土着の天敵寄生蜂が多く羽化するエンドウ葉を1mm目程度の網袋に入れてハウスに持ち込めば、トマトハモグリバエの防除効果が認められます。また、露地では天敵に影響の少ない薬剤を中心に防除することで、土着天敵による害虫の抑制効果を増すことも可能です。

天敵利用には、消費者の安心・安全な農産物に対するニーズに応え、なおかつ作業的には省力という大きな利点があります。一度試してみられてはいかがでしょうか。

(専門研究員 東浦祥光)

IV 参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

（注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（2月23日福岡管区气象台発表）

予 報	高 い (%) 多 い	平年並 (%)	低 い (%) 少 ない
気 温	50	30	20
降 水 量	40	30	30
日照時間	30	30	40

週ごとの気温傾向

予 報	高 い (%)	平年並 (%)	低 い (%)
1 週 目	60	30	10
2 週 目	50	30	20
3～4週目	30	30	40

3 3月のテレホンサービスの内容（予定）TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬 下旬	3月の発生予報、ナシ黒斑病の防除、イチゴ病害虫の防除 タマネギ病害の発生状況と防除、カンキツかいよう病の防除、トマト黄化葉巻 病対策